

令和元年度資源評価報告書(ダイジェスト版)

[Top](#) > [令和元年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 ニシン

学名 *Clupea pallasii*

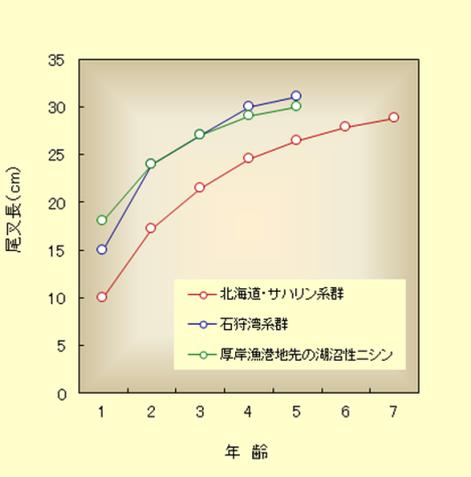
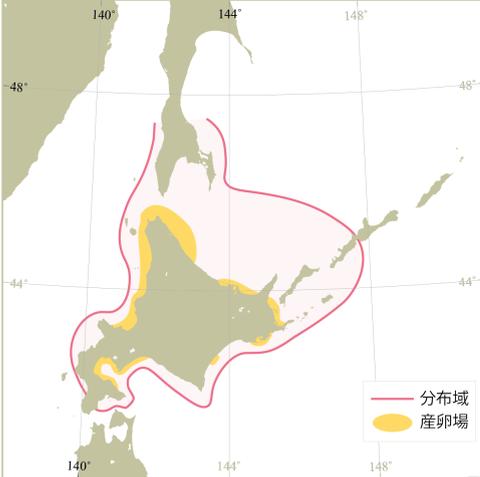
系群名 北海道

担当水研 北海道区水産研究所



生物学的特性

寿命： 6～7歳（地域性ニシン）、10～18歳（北海道・サハリン系群）
 成熟開始年齢： 地域性ニシンでは2歳（100%）、北海道・サハリン系群では4歳（50%）
 産卵期・産卵場： 1～5月（地域性ニシン）、3～5月（北海道・サハリン系群）、地域性ニシンは北海道沿岸域や汽水湖沼域で産卵、北海道・サハリン系群はサハリン南西沿岸で産卵
 食性： カイアシ類、端脚類、オキアミ類、魚類（卵・仔稚魚を含む）
 捕食者： 大型魚類、頭足類、海産哺乳類

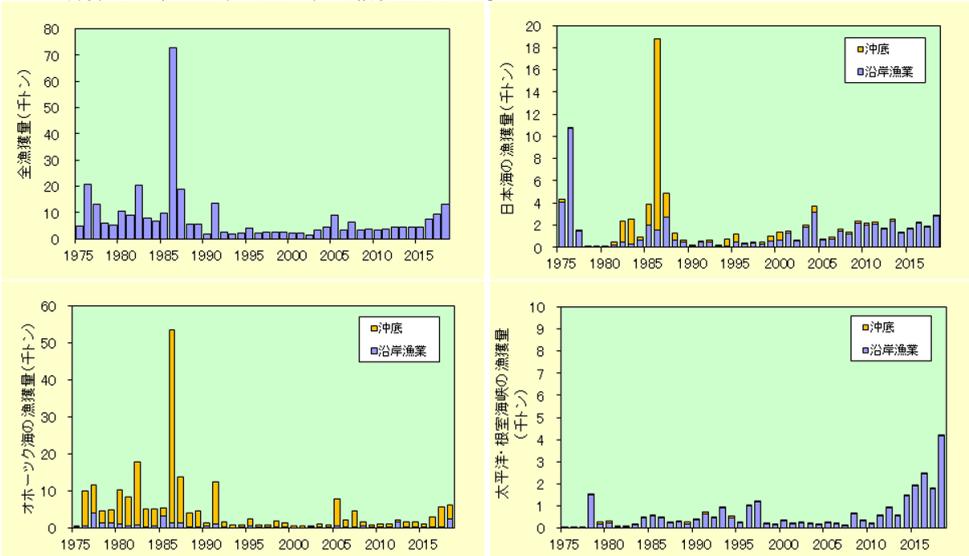


漁業の特徴

19世紀末～20世紀初頭には北海道・サハリン系群が大規模に資源を形成した。しかし、同系群は20世紀中頃に著しく減衰したため、近年の主な漁獲対象は地域性ニシン（石狩湾系群および沿岸各地の湖沼性ニシン）である。漁獲は刺網や小型定置網などの沿岸漁業と沖合底びき網漁業（沖底）による。漁期や産卵群、索餌群、越冬群などの漁獲対象は水域により異なる。種苗放流対象であり、2017年には565.2万尾が放流された。

漁獲の動向

2018年の全体の漁獲量は13,263トン（沿岸漁業が9,363トン、沖底が3,901トン）であった。地域別には、日本海では、1990年代から沿岸漁業の漁獲量が沖底より多く、2000年以降更に増加傾向にある。オホーツク海では、沖底の漁獲量が多いが、2018年には沿岸漁業が2,358トンと大幅に増加した。太平洋・根室海峡では、沿岸漁業の漁獲量が大部分であり、2018年は2017年の2倍以上となった。

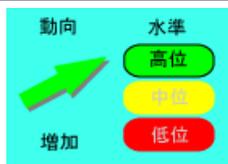


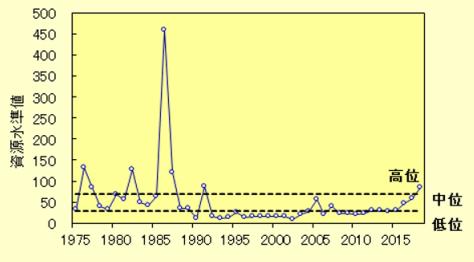
資源評価法

近年では、北海道・サハリン系群によると考えられる漁獲量の増加は頻繁には起こらず、北海道周辺の資源は石狩湾系群および沿岸各地の湖沼性ニシンによって主に支えられている。北海道・サハリン系群が減衰した後（1975年以降）の沿岸漁業と沖底による漁獲量の合計に基づいて資源評価を行った。

資源状態

資源水準は、1975～2018年の漁獲量を平均した値を50として各年の漁獲量を指標値（資源水準値）化し、70以上を高位、30以上70未満を中位、30未満を低位とした。2018年の資源水準は、資源水準値が84.1となったため高位と判断した。動向は、直近5年間（2014～2018年）における漁獲量の推移から増加と判断した。資源状態の好転は、日本海で主な漁獲対象は1～2歳魚ではなく3歳魚以上であるために親魚量が維持されたこと、オホーツク海で沿岸漁業の漁獲量が増加したこと、太平洋・根室海峡で風連湖、厚岸湾・厚岸湖の産卵場由来する地域性ニシンの資源状態が良好に保たれていることに起因すると考えられる。





管理方策

各地の地域性ニシンを漁獲対象とする沿岸漁業の管理が重要である。多くの漁場において、産卵親魚を確保する目的で刺網の目合を規制することによる未成魚の保護が行われている。日本海では、刺網の目合が大きくなったことにより、親魚量が確保され、資源状態が好転した。このような取り組みの継続は不可欠である。種苗放流は地域性ニシンの分布域の広範囲で行われるようになったが、稚魚期までの生残が加入量変動に大きな影響を及ぼすと考えられるため、産卵場となる沿岸域や汽水湖沼域の環境保全と並行して進める必要がある。

資源評価のまとめ

- 資源水準は高位、動向は増加
- 資源状態の好転は、日本海で親魚量が維持されたこと、オホーツク海で沿岸漁業の漁獲量が増加したこと、太平洋・根室海峡で地域性ニシンの資源状態が良好に保たれたことに起因すると考えられる

管理方策のまとめ

- 各地の地域性ニシンを漁獲対象とする沿岸漁業の管理が重要である
- 未成魚を保護することによる産卵親魚を確保する取り組みの継続は不可欠である
- 種苗放流は、産卵場となる沿岸域や汽水湖沼域の環境保全と並行して進める必要がある

執筆者: 横田高士・千村昌之・境 磨

資源評価は毎年更新されます。